
いちごの砂糖漬け

霧ヶ峰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いちごの砂糖漬け

【Nコード】

N1781X

【作者名】

霧ヶ峰

【あらすじ】

あまり目立たないようにしている女の子が偶然が重なって好きな人に料理を教えたり、告白しないといけない状況になる話。

いちわめ（前書き）

初投稿で初小説です。

いちわめ

栗色の髪に色素の薄い茶色の目。整った顔立ち少年がパンを片手に友人たちとじゃれあっている。

学校の屋上で、あの人を見ながら昼ご飯を食べる。私だけの至福の時。それがあの日から私の平穏な日常が変わり始めたのだ。あんなに取り繕ったものが簡単に剥がれ落ちるなんてこのときは何も思っていなかったのだ。

「三宅さん？」

「へ？」

初めて声をかけられたのは近所スーパーの前でだ。あの人華奢な手にはスーパーの袋がぶらさがっている。袋の中からネギやゴボウ、特売品の刺身のパックが顔を覗かせていた。

うん、似合わない。

「西東くんだね？」

「うん、こんなところで三宅さんと会うとはね」

私もこの寂れたスーパーで西東くんに会うとは思わなかった。西東くんと言えば校内でも結構目立つグループにいる。友達と一緒にコンビニにいたところは見たことはあるが、このスーパーで彼を見た

ことは無い。

「三宅さんはなにを買いにきたの？」

「晩御飯のおかず。西東くんは？」

「・・・俺も」

西東くんが苦い顔で言葉を発したので私はすごく驚いてしまった。そこで初めて気づいたが私は彼の笑顔しか知らないのだ。おそらくだが彼のクラスメイトも、友人も、この彼の姿を見たことがないのではないか。

彼はそんな私の様子を見て苦笑いしながら言葉を続けた。

「・・・父さんが働いてたんだけどね、リストラにあっちゃって。新しい職場探してるんだけどみつからない。給料は無いし、今にいたっては家で酒ばかり飲んでるから、母さんがパート行くことになったんだ。だから今日から家事は俺の役目」

西東くんのお父さんは有名な会社で働いていると聞いたことがある。その会社については知らないが西東くんはこの頃の昼食は菓子パンばかりだった。そう言う理由だったんだ。

でも、ちよつとまっつて。

「ひとつ聞きたいんだけど・・・そんな話わたしにしてよかったのかな？」

「うん・・・それはいいんだ。誰かに聞いて貰いたかっただけだし。三宅さん口固そうだから。あと、ちよつとだけ心が軽くなった。ありがとう」

西東くんの笑顔を間近で見ってしまった。すごい羞恥心に襲われて顔が赤くなり目をそらしてしまった。けどそう言われて私は胸を撫で下ろす。少し西東くんのためになれたかな。

「ところでいつも、晩御飯は三宅さんが作ってるの？」

「う、うん。うち、お母さんもお父さんも働いてるし出張多いから。兄さんもいるけど1人暮らししてるしね」

私の家では小さい頃から両親が働きに出てたから、家事は私と兄の仕事だった。特に料理は兄が苦手な事もあって得意だったりする。

そついうと西東くんは目を輝かせて

「三宅さん、頼みがあるんだけど・・・」

「料理教えてくれないかな？」

いちわめ（後書き）

多分続きます。

にわめ

「え？」

わたしは口を大きく広げたまま固まってしまった。

「だから、料理教えてくれないかって」

「だめだよ！私の料理、家の味だし、自己流だから、西東くんが食べるようなご飯作れないよ！」

「西東くんが食べるようになって…俺がどんな料理を食べると思ってるか知らないけど、今までは母さんの手作りだったし、小学生のときはみんなと同じ給食を食べてきた。あと俺、家庭の味って好きだよ」

そんなことを言われてまた顔に血が上ってしまった。今私の顔は目に見えるほど真っ赤だろう。

「けど……」

本当は教えてもいいかもしれないと思ってる。けど、私には無理だ。西東くんは人気がある。クラスメイトの安達さんとか、合唱部の三枝さんとか・・・私の知っているだけで片手の数ではくらないほど彼のことを好きな人がいる。このことがあの人たちにはばれてしまったら平穏な生活は送れないだろう。

「やっぱり私には無理だよ」

「・・・そこまで言うなら仕方ないか」

よかった。ちょっと残念だけどこれも私の平穏な学園生活のため。

ありがとう、西東くん！

「そういえば前から気になってたんだけど、裏庭で昼飯食べてるとき視線を感じるんだよね」

ギクッ

「あ、三宅さんっていつも昼飯食べてる屋上から裏庭見えたよね」

あーこれはもしかしてのもしかして最初から気持ちがばれてたパターンですか。いやーそんなことこれっぽっちも気づきませんでしたよ。

「もしかして…」

うわああああああああああああああ

「飯田が好きだよね？」

「え？」

「あ、違うか。じゃあ健司？」

気づいてなかったああああああ

そうだ、そうだった。西東くんはいつもグループでご飯食べてるんだ。でも、好きな人が自分だとはこれっぽっちも思っていないようだ。抜群プロポーションの安達さんの悩殺アタックも、小悪魔系女子三枝さんのベタベタアタックも気づかないくらいだもんね。西東くんは近年稀に見る鈍感男子だ、理解した。

そんなことを考えてたら西東くんは無言を肯定ととつたらしく、

「健司が好きだったこと、バラされたくなければ料理を教えてくださいな。了承してくれるなら誰にも話さないよ」

健司君には悪いけど、これは好都合なので騙されておいってください。でもそれならばここで断るのはおかしいかな。
んー・・・仕方ないか。

「わかりました。その代わり絶対バラさないで」
「大丈夫。約束は守るよ」

今までで一番の笑みをとて近くで見えてしまいました。

思考が停止して、そこからの会話は覚えてません。

思考が正常に動き出したとき、私は私室のベットの上にいました。しかも、目の前には西東くんの綺麗な顔があります。神様は私を殺す気なんですね？

「大丈夫？いきなりなにも反応しなくなったからびっくりして・・・」

西東くんが私の心配をしてる。不謹慎だけど少し嬉しい。

「あれ、なんで西東くんが私の家に？」
「あ、それはね・・・」

「佐奈江、生きてるか」

ん、なんか聞き覚えのある声が聞こえたような…

「おい、起きたならさっさとベットから出て顔洗え」

「うるさいわね四郎。なんでここにいるの」

こいつは幼馴染で悪友の木村四郎だ。四郎とは昔から一緒に悪さをしてきたんで、私の隠したい過去を大量に知っていたりする。いつもうるさいお母さんみたいで頼れるんだけど、頭が悪いのか口止めしているのに私の過去を何度も人に話そうとする。まあ、いつも私が止めてるけど。

ってかこいつ、隣の家に住んでいるはずなんだけど…

「そんな口きけるなら大丈夫だな。ああ、スーパーの前で倒れてる佐奈江見つけて、西東に家教えたのは俺だぜ。運んだのは西東だけだな」

「はあ？なんで西東くんによらせるのよ！四郎が運べばよかったじゃない！」

四郎はボクシング部だ。力だけは大量に有り余ってる。

「それは俺から言っただ。こう見えても力あるし、三宅さん軽かったよ」

そんなことを言われ恥ずかしくて縮こまってしまった。

「三宅さんって木村と一緒にだと雰囲気が変わるんだね。やっぱり幼稚園の頃から一緒だからかな？」

あれ？なんで西東くんがそんなことを知ってるのかな？誰にも話していない筈なんだけど。犯人は一人しかないよね。

「四郎！あんたまた勝手に話したの？前にも言ったよね、昔のこと話すなって。どこまで話したのよ、吐きなさい！」

どうしよう！昔のことがばれたら西東くんに引かれる可能性大だ。

「いやー、小学生のときいじめっこやってたこととか、中1のときに中学校の番長倒して一部で有名だったこととか、色々」

・・・もう死んだ。さようなら大人しい私。さようなら西東くん。

「うん。本当にかっこいいよね。三宅さんの武勇伝。学校での三宅さんより、こっちの三宅さんのほうがいいよ」

「え」

「今度から俺にも普通に話してね？」

あれ、幻聴かな？西東くんが嬉しそうに話してるよ。

「ん、もうこんな時間だ。今日のところは帰るね。また明日来るか。今度は料理教えてね」

そう言っただけで西東くんは去って行った。

「ねえ四郎」

「なんだ？」

「これって夢かな？」

つい聞かなくてもわかってることを聞いてしまった。

「現実だ」

頭がまだこの状況を読み込めていないのか、私の意識はまたブラッ
クアウトしてしまった。

さんわめ

窓から空を見る。今日の空は雲一つない青空だ。でもわたしの心は微妙な曇り空。この空を見ていると昨日のことが嘘のような気がしてくる。

「佐奈江」

この声は四郎のものだ。朝が弱い私のために四郎のお母さんが迎えを寄越してくれる。

「現実逃避している所で悪いが早く行かないと遅刻するぜ」

げ、もういつも出発してる時刻になっている。

「ありがとう。…四郎はどうするの？」

「俺と一緒に行くの嫌だろ」

そりゃ、四郎みたいな目立つ男子といたらなに言われるかわかってるし。

「…まあね。いつてきます。鍵よろしくね」

「おう」

四郎には家の鍵を渡してある。それは四郎に絶対的な信頼を寄せているからだ。好きとかそういう感情は一切ないが私の背中を任せられるのはあいつしかいないと思っている。
好きなのは西東くんだけだね。

「おはよう」

「おはよう、佐奈江ちゃん！」

このふわふわ可愛い女の子は市原亜子ちゃんだ。中学校のときにいた後輩にそっくりでホント可愛い。

「亜子ちゃんおはよう。今日は教室騒がしいね。何かあったの？」

「また男子が暴れてるだけ。殴り合いとかしないでだけマシだけど消しゴムのカス投げ合ったり、授業中に先生で遊んだり、今時小学生でもやってないようなことをしてるよね。藤中くんたち」

このちょっと毒舌な所も彼女の愛すべき場所だ。ちょっと言いすぎだとは思うが、でもこの頃藤中たちが調子のつてきてるのは本当。

『俺ってみんなの人気者？ふざけてる俺かっこいい』みたいなことでも思ってるのか？鬱陶しい。ああ、一発殴りたい。

「本当にね。でももう高校生なんだよ。そのうちに今やってることが恥ずかしくなって、すぐにやめて大人になるよ」

「そうだいいんだけど…」

そんなたわいもない話を続けていると先生がきたのでおしゃべりを中止し席へ戻る。

「えー今日の予定は…」

今日は西東くんが家にくる。昨日のうちに部屋は掃除したし、料理

の本もかたつぱしから出してきた。
今日は浮かれて真面目に授業を受けられないだろう。まあ、大丈夫だろうけど……。

「佐奈江ちゃん大丈夫？」

「うん……」

大丈夫じゃなかった。すべての授業が耳に入ってこないんだよ。先生にあてられて何も答えることができなかった。藤中たちには笑われるし。あいつ殺すいつか殺す。

うん、そうだ。亜子ちゃんにノート借りよう。あの子のノートは私のより綺麗だ。あー亜子ちゃん可愛い。

「亜子ちゃん。ノート貸して、明日返すから」

「うん。私のでよければ」

ここまでではよかったんだ。

「うわっ、あいつ市原にノート借りてるぜ」

「ああ、三宅か。あいついつも市原の近くにいてるけど、おこがましいっていうか引き立て役みたいなの？」

「頭も悪いみたいだな」

はははははははははははははははははは

こいつらここまで頭がイッてるとは思わなかったわ。本当のことで

も言っていることと悪いことがある。馬鹿なの死ぬの？

「あいつら！」

亜子ちゃんが出て行くことするけど、私が手を掴んで止めた。

亜子ちゃんには悪いけど目立ちたくないんだもん。今日西東くん来るし、早く帰りたい。

「まあまあ亜子ちゃん。あいつらのあの姿をみてみなさい。あの腰パン、ズボンをちゃんと上げれない小さい子供みたいでしょ。あいつらは体だけは育った小さい子供なのよ」

「
プ
ッ
」

気づかなかったが、私はそうとうムカついてたようだ。

「おいでめえ、今なんつた」

「うるせえんだよ！」

あーうるさいうるさい。おまえのピーちゃんぎってやろうか。

けど、ここで藤中に一発かましたらこれまで取り繕ってきたものが剥がれ落ちるだろう。

西東くんがどーのとーのだって言う前に自分から死地に片足を突っこんでしまった。時間、まきもどらないかな。

ここで少女漫画のヒロインだったならヒーローが助けにきてくれるんだろう。目立ちそうだけど。

「藤中！二宅さんになにしてるんだ」

おっと、ここでヒーロー西東くんの登場だ、つてえええええええええええええええ

なんで西東くんがここにいろの？しかもいいのか悪いのかこんなタ
イミングに・・・。

「なんで西東がいるんだ」

「つーかおまえには関係ないだろうが」

みぎよりし、ひだりよりし。この教室に残っているのは藤中とその取り巻きたち、亜子ちゃんに私と西東くんだけだ。安達さん（西東くんが好きな女子のうちの一人）がいたらいろんな人にこのことがしれわたっていただろう。あの人は噂の発信源みたいなものだしな。

「三宅さんは俺の友人だ。馬鹿にするのは許さない」

隣の亜子ちゃんからいかにも興味津々といった眼差しが送られてきます。いやーやめてええええええ！

・ ・ ・ ハアハア、この私壊れてきたような気がするわ。

でも西東くんよ、助けるならもっとスマートに助けて欲しいな。かっこいいけど。

「藤中！もう５時だぜ。女子高の女と遊ぶんだろ、早く行こうぜ」

「ちっ、仕方ない、行くぞ！」

こうして嵐のようなコマは去って行った…と思いきや

「明日は覚えとけよ」

意味深な言葉を残して行きました。関係ないけど今のセリフ悪役みたい。

「佐奈江ちゃん！大丈夫？」

「うん、変なことに巻き込んだじゃってごめんね」「ううん、佐奈江ちゃんは悪くないよ。ねえねえそれより、何時の間に西東くんの友達になったの？」

答えにくいことを聞くなあ。さて、どうこたえるか。

「えーと、えー、かくかくじかじかで…」

「もう！小説や漫画じゃないんだからそんなのじゃわかんないですよ！」

まあ、今日の所は帰るね。明日はちゃんと全部聞かせてもらうから！」

「何か用事でもあるの？」

「むむつ。あるのは佐奈江ちゃんでしょ？予想だけど西東くんがこの教室来たのって佐奈江ちゃんに会うためでしょ？ああ、私お邪魔かな。じゃあね！」

「う、うん。バイバイ」

「さよなら、木村さん」

「西東くん。何か用事があつたんじゃないの？」

そういえば、と西東くんに聞いてみる。

「んー、昨日の料理の件、あやまりにきたんだ」

「え、なんで」

「昨日は強引過ぎた。ほんとごめん。脅すようなことも言っちゃったし、断ってくれてもいいよ」

「うっん。一回私が引き受けたんだし最後までする」

考える前に先に言葉が出た。やはりいろいろ取り繕っていても出てくるものはあるのだろう。

「そっか」

返事したことに後悔はない。むしろ役得だった。西東くんのハニカミ笑顔見れたしね。

「一緒に帰ろうか？今日は卵焼きの作り方を教えるよ」

「了解です。できれば甘いのがいいな」

「ふふっ、オッケー」

そう言って私たちは歩き出した。

過去編（前書き）

本編更新しなくてすみません。

過去編

今時あり得ない下駄箱にラブレター。

もつとあり得ない校舎裏の桜の木の下に呼び出された三宅佐奈江は、幼馴染で友人である木村四郎を引き連れて待ち合わせ場所に立っていた。

「佐奈江、なぜここに俺を連れてくる」

「そんなの決まってるじゃない。手っ取り早いからだよ」

桜の木の下とはいっているが今は夏だ。ピンクの可愛い花も、甘い匂いもない。清々しいくらいの緑がそこら中に広がっている。その下で言い争っている男女は第三者からみれば痴話喧嘩のように見えるかもしれないが、二人を知っている人物なら誰しもその様なことがないことがわかるだろう。

「いくら楽だからっていつでもよ、火の粉が吹きかかるのはこっちなんだぜ」

「四郎なら火の粉くらいかかって大丈夫よ。四郎のいいところはその丈夫な体だけだと思う」

「なんだと！」

「本当のことを言っただけだよ」

四郎は言い返そうとするが背後から足音が近づいて来たので途中で言葉を飲み込んだ。

「三宅さん。来てくれたのは嬉しいけど、隣の男は何かな？」

二人の後ろから優男風の男が現れた。恥ずかしいラブレターを書き、

この時代遅れな呼び出し方をした張本人、桜井平祐だ。サッカー部のキャプテンで月に五人には告白されるほどのもてつぷりだ。

佐奈江は隣にいる四郎と腕を組み、表の顔で対処した。

「桜井くん。こういう訳だからあなたとは付き合えない。本当にごめんね」

佐奈江は顔は中の上だ。なのに何故か顔のいい男が引つかかる。その度に四郎が恋人役になって追い払っているが、四郎にはなぜ佐奈江に集るのかわからない。

「その隣のやつ木村四郎だよ。君みたいな大人しい子にそんな不良は似合わないよ」

その言葉を聞き、四郎は笑いを堪えるのに必死になった。

「なに笑いそうになってるのよ」

「だって」

三宅佐奈江は学校では素行の悪い四郎の幼馴染と認識されている本当は違う。佐奈江は四郎より遥かに強い。昔から祖父の道場に通っていたからだ。その辺の不良を殴り倒しているうちに『裏の番長』と呼ばれることになった。正体はばれていないが佐奈江の知らぬ間に『裏の番長』の名はそこらじゅうに知れ渡っていた。

そんなこともつゆ知らず、桜井は二人で小声で話していると苛立ったのか先ほどより強い口調で話しかけてきた。

「木村四郎なんかといったらいつ襲われるかわかんないよ。あいつなんかやめて俺と付き合おう！」

その言葉を聞いてこらえていたものが決壊した。

「あははははははははははは」

「四郎！こんな所でわらわないでよ！」

「はははっ、だって大人しいとか、襲われるとか一番佐奈江に似合わない言葉じゃないか」

「四郎。黙りなさい」

「ふっ」

四郎の鳩尾に佐奈江の容赦ない鉄拳がとんできた。四郎はその場でうずくまる。

桜井は未だに見たことが信じられないのか某前としている。

「桜井くんだったっけ？今見たこと忘れてくれない？」

桜井は未だに固まっ
ていて佐奈江の言っ
ていることが理解で
来ていない。

「ねえ、話聞いてるの？それとも四郎みたいに実力行使に出ないとわかんない？」

桜井の顔はみるみるうちに青くなつて行く。やつと佐奈江の言うことが理解できたのか首を上下に降り、震えながらこの場を去つて行った。

「佐江、いくらなんでも脅しすぎじゃないか？」

「脅してないわよ。あいつは上辺の私しか見てなかったからああなったのよ」

「上辺つて．．．お前が本当を見せてないんだろ。そんなんじゃないか壊れるぞ」

「・・・そうかもね。」

佐奈江は珍しく弱音をはいた。いつも、すこし傲慢で前向きなのに。佐奈江の不安そうな顔を見たのは四郎はこれが初めてだった。

「私を受け入れてくれる人っているのかな？」

「大丈夫、現れるさ。それまでは仕方ないから俺がそばにいてやるよ。」

「・・・ほんと今日は四郎のくせに生意気」
「言ってる」

そこで風が吹いた。夏の乾いた風だ。いつもは少し不快なのに佐奈江には嫌なものを全てを吹き去ってくれたように感じた。

「帰ろうか」

二人はどちらともなく呟いた。それに答えるように夏の風が二人の間を通り抜けた。

よんわめ

今、西東くんと私は自宅のキッチンにいる。西東くんに料理を教える為だ。

「さて、それでは第一回三宅流料理教室を開催したいと思います」
「おー」

でもこれ、二人でも虚しいだけだな。

…まあいいや。

それより今は料理の献立のことだ。卵焼きとお米炊いて…あとなに作ろうかな？西東くんに聞いてみるか。

「西東くんにか好きな食べ物とかある？」

「角砂糖かな」

・・・ん？

「・・・じゃあ料理では？」

「チョコレートフォンデュ。三宅さんは甘いもの嫌い？」

「いや、嫌いじゃないけど」

好き嫌いじゃなくて根本的に間違ってる気がする。そんなものすこい笑顔で言われてもどんな反応をすればいいか悩むよ。
けどどうやら西東くんはとても甘いものが好きらしい。

・・・デザート、なにか作ろうつと。

「じゃあ、嫌いなものとかある？」

「それはないよ。でもわけわかんない国の食べ物は苦手かな」

「ははっ、なにそれ」

んーそれだったら、初心者でも簡単なやつで。あと甘くて、あつ西東くん家庭の味が好きだっていつてたな…。なんか新婚夫婦みたいってうわああああ！私ってばなにを考えてるんだ！告白してねえんだぞ！

はあ、落ち着け私。そうだ。西東くんには卵焼きだけ作ってもらって他のは私が作ろう。

「それじゃあ西東くんには卵焼きだけ作ってもらいます」

「難しそうんだけど俺に作れるかな？」

「大丈夫大丈夫！私も手伝うから」

「そうだよね！……うん、ごめん」

「なんか言った？」

「ん、なんでもないよ」

どうかしたのかな？まあ大丈夫だろう。
よし！

「献立が決まりました。メニューは米と肉じゃがと卵焼き。そして食後のデザートはパウンドケーキです。西東くんには卵焼きを作ってもらいたいです。作り方は随時教えます」

「了解です。他は三宅さんが作るの？」

「料理初めての人に全部作れとか酷なことは言えないからね」

「わかった。精一杯のことはするよ」

どうしてこうなった。

「これはなにかな？」

「・・・卵焼きです」

「私、引っくり返すところまでやったよね。あとお皿に移すだけだったよね」

「・・・はい」

テーブルの上にはホカホカの肉じゃがと白く輝いたお米、いい匂いのパウンドケーキ。

あと…黒い奇妙な物体がのっていた。

「ごめん。俺、昔料理の練習したことがあるんだけどちょっと手を加えるだけで料理を灰にしちゃうみたいなんだ。だから三宅さんに料理のことたのんだんだけど…なんでこうなっちゃうんだろ…」

うん、その台詞私が言いたいくらいだよ。

「ま、まあ今日は初日だし頑張ったほうじゃないかな？」

「いや、ほんとごめん。食材無駄にした」

西東くんが本当に悲しそうな顔をして言う。

「やっぱり俺には無理なのかな…」

「今からそんな弱気になってどうすんのよ。大丈夫、明日があるし明後日もあるんだ。毎回弱気になってたらつかれるよ」

あ、私今いいこと言っただんじゃない？

けどちょっと寒かったような…

「ありがとう。でも三宅さん、その台詞ください」

「うわあああああわかってる！今ちょっと後悔してるところなんだ！そつだ、ご飯早く食べないと冷めちゃうよ。いただきます！」

「はははっ。いただきます」

恥ずかしい！私は羞恥心を紛らわす為に食べることに逃げた。

「あ、それ食べちゃだめだ！」

「へ？」

ところ構わず食べに食べた。そう、あの黒い物体までも腹の中へ入ってしまったのだ。

「うっ！」

「三宅さん！しっかり！」

西東くんが呼んでる。答えないといけないのに、意識が遠のく…。

くらい。あれ？こんなこと前にもあったような。

「三宅さん！大丈夫？」

え。西東くん？ああ、少し意識が飛んでいたみたいだ。

「大丈夫。…西東くんの料理すごいね」

「ごめん。次はちゃんと食べられる料理を作れるようにする。あ！」

「どうしたの？」

西東くんはメールがきたみたいで携帯を操作しながら言う。

「木村くんがここに来るらしいよ。ご飯作ってたって」

あれ？西東くんって四郎のメールアドレスしってたってけ？
すると私の考えてることが顔に出たのか西東くんは答えてくれた。

「この前三宅さんが倒れたとき教えてもらったんだ。三宅さん、あまり身体強くないって聞いたから何かあったときの為につて」

「そんなことまで四郎と話してたんだ」

「うん、勝手に聞いてちゃってごめんね」

「謝ってもらわなくてもいいよ。どうせ四郎からはなしたんでしょ」
「まあ、そうだけどね」

それからたわいのない話を続けているうちに四郎が来たらしい。

「おー西東。こいつの面倒見ててくれてありがとうな」

「毎度のことだけどノックくらいしなさいよね」

四郎は呑気に私の部屋に入って来た。いつものことだけど。

「佐奈江、調子悪そうだな？何か食ったか？」

「あ、それは俺が変なもの食べさせちゃったんだ」

西東くんが言うと四郎は納得していない表情で

「お前そんな繊細な腹してたっけ？」

と不躰なことを聞いてくるから西東くんの料理を口の中に突っ込んで見た。

やはりあの料理？は破壊力抜群らしい。四郎は儚くも散っていった。
ざまあみろ！

私たちはみんなでご飯を食べた。西東くんはパウンドケーキが気に入ったようで、今度作り方を教えて欲しいとのことだった。
それから少しして西東くんと四郎は帰っていった。

今日はたくさん西東くんと話したなあ。

それと明日も料理を教えることになった。明日は楽しみなんだけど、思い返してみれば学校での藤中の言ったあの言葉が心配だ。

『明日は覚えとけよ』

…ぶつ。いやーこの台詞はないわー。でも藤中たちのことだからよからぬことをたくらんでいるんだろう。あいつらの下衆な脳味噌で考えつくことは少ないかな。

明日の決戦に備えて今日は早く寝るか。

そのときの私は凄く君の悪い顔をしてたことだろう。

おやすみ。また明日。

私は心の中で西東くんのに語りかけた。

いわめ

「三宅さんだっけ？あんだみたいな地味なのが西東くんと仲いいって聞いたんだけどなんかの間違いよね？」

やっぱりこうなったか。

今は放課後、そしてここは視聴覚室だったりする。そしてここにいるのはあの藤中たち、そしてクラスメイトの安達さんだ。

藤中がこんな仕返しをしてくるとは思ってなかったよ。そういえば藤中、安達さんと仲よかったっけ。まあ藤中が安達さんを好きなかただのようだけど。

「なんなんですか？いきなりこんな所に連れてきたりたりして」

「うるせえ！大人しく安達さんの質問に答えろよ！」

はあ？無理矢理ここに連れ込んだのはそっちだろうが！事情説明しろよ。まったく。

…言わないけどね。

私は大人しい佐奈江ちゃんだもの。

でも視聴覚室なら音がもれないからってちょっとやりすぎじゃないかな？あとこいつら無駄に手際がいいな、何人もの子に同じことを働いていそつだ。

っていうか藤中らだけに恨み買ったはずなのになんなんだこれは？

「西東くんとはただの友達で…」

「嘘よ。西東くんが何も言わないからっていい気にならないで」

この気のキツイ美人さんは安達さん。頭も良くてすごいひとなんだ

けど、自分の思った事に一直線な子だ。彼女に地味な女と西東くんとが仲がいい。一方的なストーカーと脳内変換されているらしく私を駆除しようと必死らしい。

まあそれもこれも藤中が安達さんに昨日のことを話したことが原因だ。藤中のせいだ。ホントうざい。

「西東くんも迷惑してるわ！いくら好きだからでは通用しない、もうつきまとわないで」

「そんな、私つきまとうなんてしてない…」

安達さん、頭大丈夫かな？付き合ってるわけでもないのに。こっちが心配してもしようがないか。

「でも西東くんも西東くんよ！いやならいやと言えればいいのに！もうなんでこんな子と！」

「安達さん。こいつ懲らしめてやりましょう！こんな喧嘩とは無縁そうなやつちよつと殴ればビビって近寄らなくなりますよ！」

「そうですよ！」

はあ？何言い出すんだこいつら！私が先生に話すとか思わないわけ？しかも殴ったらあと残るしバレバレなのに。

「…そうね。やってしまいなさい」

って暴力反対！ここまでするか普通？

あーもう今日は西東くんくるのに！遅れたら何かあったのかって疑われる。どうしよう！

「こいつひびってるぜ」

「ああ、顔はバレルから殴らないようにしろよ」
「わかってるって」

私のどこが怯えてるんだよ。

…もういつか。西東くんにはばれてるし。こいつらを口止めしたらばれないよね。私、今までよく我慢したよ。

そういえば、西東くんは昔の頃の私の話を聞いても変わらず接してくれたな。凄くあつさりだったけど嬉しかった。

『私』を知っているても変わらない人っていたんだ。西東くんもだ。ど四郎や亜子ちゃんもいてくれたんだ。

自分をされけだしてみよう。

少しだけ勇気を。

…警察に捕まらない範囲で。

「あんたたちさあ、さっきから生意気な口聞きすぎじゃない？」

私がそう言つと皆びっくりしたような顔をした。私がこんな口答えをするとは誰も思っていなかったようだ。

「はあ？お前なに言ってるんだよ」

「いきなり粹がるなよ！」

「うるさい」

今の藤中や安達さんの顔みんなに見せてやりたいね。

私は藤中の顔ギリギリに壁を殴る。

少しの音と風で壁がへこんだ。バラバラと壁の破片が落ちてくる。

そしてその他の男共の顔から3ミリ程度の所に拳を叩き込んでいく。もちろん手加減なしで。

それから少しの沈黙があり

「うあああああああああ！！！！」

「こいつやべえ！」

安達さんは一応女子なので勘弁しといてあげたよ。それでもあまりの事に口が出せないみたいだけど。

「逃げるぞ！」

藤中たちは安達さんを置いて視聴覚室から出ていった。

「さて、あなたはどうする？」

少しの静寂のあと。

「力が強いからっていい気にならないで。西東くんは私のなのよ！」

安達さんは不気味な笑みを浮かべ凄んで見せた。まるでいきのいい獲物を見つけたみたいなの目つきだった。

「西東くんをものみたいに扱わないで。あなたなんか西東くんを好きな気持ちなら負けないよ」

そう。私は西東くんが好きなんだ。出会ってからまだそんなに時間は経っていない。けどあの人なら信じられる。

そういうと安達さんは何故か飽きたような顔をしてため息をついていた。

「…もういいわ。悪いけど手を貸してくれないかしら」
「え、うん」

安達さんはいきなり態度を変えた。その変わりように私は不覚にも驚いてしまった。

「今日の事は謝るわ。…どうしてそんな変な顔してるのよ」
「え？いやなんかあったのかなって」

どうやら顔に出てたようだ。これからは表情筋を鍛えよう。

「変わったわけじゃないわ。ただあなたが以外にも骨がありそうだったから違う方法で潰そうと思っただけよ」

凄く怖い言葉が聞こえてきたんですけど。ここは辞める所じゃないのかな？

そりゃあ西東くんの事好きだし、付き合えればいいなと思ってたりするけど潰し合いとかしたいわけじゃないよ。この頃話し通じない人多くないかな。

「私は帰る。ああ藤中には私から手を出さない様に伝えておくわ。」

「じゃあね」

「え、あ。ありがとう」

あれ？友達とかじゃなかったよね。でも安達さんはいい人のようだ。話し通じないけどね。

みんな帰ったあとの視聴覚室はとても静かだ。

この数日で色々な事があり過ぎて世の中を達観しちゃいそうだ。あー明日は大変かな。

ま、そんな事より

「西東くんも来る事だし早く帰ろうか」

ろくわめ

今日もいい天気です。昨日は安達さんとのことがあった後、西東くんが来てくれました。私の事を探してたんだそうだけど、姿が見えなくて焦ってたそうだ。すいません…。西東くんには迷惑かけてばかりだな。

「三宅さん！前っ前見て！」

「へっ？」

そうして見た前方は光が反射して真っ白に見えた。

ゴオオオン

「痛っ！」

痛みで正常な思考が出来ていないが私が自動ドアに顔面から衝突した事は理解した。

羞恥と痛みで何もできずにいると額にぬくもりを感じた。
気持ちいい…。顔を和ませていると

「大丈夫？」

・・・っ！！！！

「ふぁっただだだいじょうぶ！」

びっくりした！温かいなーとか思いながら微睡んでたら、さっ西東

の手がつ！

うわー恥ずかしい！

「そう？我慢とかしないでね」

「めっちゃくちゃ頑丈だから全然平気！」

隣にいるのは西東くんだ。黒のＴシャツとジーンズというカジュアルな格好だけど、西東くんが来たらすぐくさまになる！いつも見ている制服もかっこいいけど私服も素敵だ。やっぱり顔のいい人は何着ても似合うものなんだな。

まあそんな事はおいといてだ、実は私、西東くんと二人っきりで外を歩いてます。

なんと今、私は…

西東くんとデート中なのだ！

事の発端は昨日、私の家での西東くんのこの一言だった。

「カレーの材料って何があるのかな？」

「うーんとね、カレーの種類によって考えないとなんとも言えないかな。何でそんなこと聞くの？」

「それがね、この頃父さんの仕事が決まって母さんにも余裕が出来たし、皆でご飯食べようかなと思って」

キラキラ光ってる！

すごくいい笑顔です西東くん！やっぱり笑った顔が一番いいな。

「三宅さん？」

ハッ！顔にやけてたよね。だめだだめだ。でもよかった。西東くん嬉しそうで。

あれ？

でもそれじゃあ料理教室の事が無くなって西東くんともほとんど会えなくなるんじゃない？

「うん、それはよかった」

この時の私は強がっていったから表情が歪んでいたと思う。けどそんなことは気付かずにしゃべりつつける。

「これで私も料理教えることは無くなって手間もかからなくなるよ。西東くんと話すことも無くなるのかなあ……」

本心じゃない言葉が口から出るもう止めたいのに止められない。

「俺はやめないよ。三宅さんが嫌でもやめれない」

なんで。どうして。

「そうしないと三宅さん、俺とかかわりをもたないよね？」

だって私は地味の粹から出たくないんだもん。西東くんのは好きだ、けどそれとこれとは話が別。

「三宅さんと話すの好きなんだ。一緒にいるとなんでもないのに楽しい。」

西東くんそんなこと思ってくれたんだ。けど私は地味で西東くんはかっこ良くて。

美形は美形と結ばれる、それが定石なのに。

「こんなことは君に出会うまで知らなかった、君の傍は心地よくて手放せない」

あれ？

ってこれって告白なんじゃない？

もう地味だとかなんとか言ってるじゃない！返事しなきゃ私も西東くんが好きだって。

迷いはまだある。

けど、けどだ！

安達さんが私をライバルと認めてくれたのに、四郎が応援してくれてるのに、西東くんが誠実に心の内を明かしてくれたるのに、私は何なんだ。

ずっと引きこもってばかりで、昔の事に引きずられてばかりで。私は自分の扉を開きたい。容姿だとか関係なく西東くん…

「私も西東くんと同じ気持ちです」

それを言うと西東くんはとても嬉しそうな顔になり

「ありがとう！やっぱり三宅さんみたいに心をゆるせる友人を失えないよ」

友人？

ゆうじん？

ユウジン？

「私も西東くんのこといい友達だと思ってるよ」

今までの葛藤は何だったんだ。

なっ泣きそう。でもウザがられていないだけマシなほうかも。まだ恋愛に発展する可能性はあるはずだ。そうだなんだ。

「で、話を戻すとカレーの材料買うのに付き合っ欲しいんだ。でね、君にはいつもお世話になっているから早めに出かけて昼食奢るよ」

ああ、西東くん。これは飴にムチなの？
そんなので機嫌がなおると思ったら大間違いなんだから！

「え！いいの？今から楽しみだよ」

私のバカー！デート（誘った本人はそう捉えていない）に誘われたからってすぐに態度を変えちゃうなんて私ったら浅ましい！

「じゃあ今週の日曜日空いてる？」

西東くんには誘われるなら他の用事断つてでも行きます！地の果ても楽しく過ごせる自身があります！
まあ予定は何も入ってないけどね。

「空いてるよ。場所は任せた」

「うん。じゃ10時くらいに迎えに行くね」

うわー西東くんとデートの約束が出来たよ。もう今死んでもいい、いや今度の日曜日までは生き延びないと！ふふふっ楽しみ。

あ、また意識が飛んでいた。せつかく西東くんとデートなのに。幻覚かな？西東くんの顔が見える。麗しい。顔は心までも表している

のかな。

「三宅さんよだれよだれ」

「うほおっ!」

おっとやばいやばい。このままだと私、まるで変態じゃない。

「それじゃあ行こうか」

そうだ。私、ドアにぶつけて家の近くのコンビニからまだ動けていない。

「どんとこい!」

そう言うつと西東くんは呆れた顔をした。

「もっと可愛らしい返し方はあるんじゃない?…ま、それも三宅さんかな」

私たちのデート（主観）はまだ始まったばかり！

ななわめ

最寄りの駅からバスで数十分のところにあるショッピングモールにきました。なぜカレーの材料を買っただけなのに遠くまで来ているのかと言うと。

「西東くん！みてみて、この猫すごい可愛いよ！」

「わっ！ふわふわだね。あつ、向こうの子もかわいいよ」

「ホント！えへへ可愛いなあ」

このショッピングモールに隣接してあるの広場では頻繁にイベントが開催される。

今回のイベントは『触つてめでよう動物たち』だ。

この知らせを聞き、動物好きの西東くんと私はすぐさま行き先を近くのスーパーから変えたのだ。

「三宅さん三宅さん！向こうではうさぎがいるんだって」

「え！ほんと！」

そう言つて西東くんが指示した方を見てみると、白や茶のもふもふが沢山！

あのもふもふまで直線で約30m。待つてて。今行くわ！

駆け出したところで前にいた人の足を踏んでしまった。しかも今日履いているのは低いけれど結構細いヒール。これで踏まれたらすごく痛いだろう。

「いつ！」

「うわああああ！すみません！ほんとうにすみません！」

「いや、そんなに謝らなくても……って佐奈江か？」

ん？この声聞き覚えがすごいあるんだけど。一人は幼馴染でもう一人がその父親だ。そして動物好きでここにきている可能性があるのは……。

「四郎！どうしてここにいるのよ」

「は？なんでおまえがここに」

「それはこっちの台詞よ！」

「三宅さん！」

何か揉め事に巻き込まれたと思ったのか西東くんが走ってきた。そんなに勘違いされそうだったかな私。

「どうしたの……って木村くん！」

「ああ、西東と来てたのか」

史郎がニヤニヤしながらこっちを見る。あのにやけ面はがしてやりたいわ。

「木村くん、そういえばどうしてここにいるの？」

四郎の体がビクッと揺れ、が表情凍った。

「ああ、色々あってな。まあそんな事より、お前ら何か買いにきたんだろ。俺も付き合ってやるよ」

けど次の瞬間にはそんな姿を微塵も見せず、私たちを引っ張った。この場に名残惜しそうな視線を残して。

その姿を見た私はほくそ笑んだ。ふふっいい事思いついた。

「えーこの子達に触らなくていいの四郎？」

「えっ西東くんも小動物好きなの？」

少し大きめの声で言い、近くにいたうさぎを持ち上げる。うお！思っていた通りもふもふだ。

四郎は浮かれたようにうさぎに手を延ばしてきた、が夢から冷めたように手を引つ込める。素直じゃないんだから。

「お、おれはうさぎなんか好きでもなんでもねえ??」

その様子を見た西東くんは何かに気づいたようににやりとした。私の考えが読めたようだ。

西東くんも足元に居たうさぎを抱きかかえた。四郎の真ん前にきてうさぎをいじくりまわした。西東くんと一緒に。そして一通り撫で回したあと。

「そろそろ行こうか木村くん」

「そうね、行きましょう四郎」

この時の情けない四郎の顔は忘れる事ができないだろう。あの名残惜しそうな顔を。

「四郎くんっておもしろいね」

「当たり前、私の幼馴染だからね」

「佐奈江、どういう事だ」

場所を移してここは駅の近くのファミレス。

買い物をしたあと四郎と西東くんを連れてここに来た。西東くんは西東くんは今、四郎に頼まれ席を外している。

「何のこと？」

さっききたジュースにストローをさしながら目を逸らした。わかってるんだけどね。

「『約束』はどうしたんだ。言わないって、あの時言ったじゃないか。」

しかもお前ら、おれで遊んでただら」

ホント四郎は好きな物がかかわるときだけは熱くなるよね。今はクールダウンしてるし。いつもは母親系強面男子って感じなのに。けど、聞き捨てならないわね。

「別に話してないわよ。ちょっとほのめかしただけで。あと、忘れてない？先に『約束』を破ったのは四郎よ」

一口ジュースを飲んでちよつと一息。四郎は『約束』で言葉で思い出したように私に何も言ってこない。それぐらい私たちにとっては『約束』は大切な物だったんだ。

「…すまん」

無理やり絞り出したような声で絞り出した
言う。四郎にとってはもうあの時の記憶は薄れてきてるんだろうか。

「やっぱり忘れてたのね。……いいわ。四郎には世話になってるし
あなたが‘約束’を無視したおかげで西東くんと仲良くできてるよ
うな物だしね！。」

ま、これからもあなたが可愛い物が好きだなんて言わないから」

「西東は気づいてたみたいだけどな。多分今話してる内容もあいつ
には読めてたりして」

「四郎もそう思う？たまに私の気持ちわかるんじゃないかって思う
時があるんだよね、西東くんは」

変なところで鋭いんだよね。

「話し終わっただし西東呼ぼうか」

「そうだね。あ！西東くん」

西東くんは私たちが話が終わったのがわかったのかも近くにきて
いたようだ。やっぱり西東くんは空気を読む能力もってたりして。

「話し終わったの？」

「うん。ごめんね。待たせちゃって」

「いいよ。内緒のはなだったんでしょ。それより何か甘い物食べ
ない？俺はチョコレートにしようかな」

「んー。私はこの期間限定のタルトにするね！」

「へえーそれも美味しそうだね、僕の一皿あげるからそれも頂戴？」
「いいよー。西東くんはどれにする？」

「俺はチョコレートにしようかな…すみませーん店員さん」

デザートを頼む様子を見ていた四郎はこの光景に呆然としていた。
ハッ！

今気づいたけど今まで西東くんとすごい恥ずかしいことしてなかったかな？ いや、していた。

「おまえらって付き合ってたのか？」

「え！そんなことないよ！」

私たちってそんな風に見えてるんだ！なんかだか照れるな。

けど、私はこんなののに西東くんは全然慌ててない。私に恋愛感情なんてこれっぽっちもいだかれてないんだ…虚しいな…。

この時に食べたケーキはあまり味がわからなかった。

それからの帰り道、四郎は寄るところがあるらしいので駅で別れた。
なので今は西東くんと二人きりだ。

「今日は木村くんと会ったし楽しかったね」

「うん」

今日は楽しかった。四郎にあった事は予想外だったけどそのおかげで西東くんと無言の時を過ごす事はなかった。けど四郎が来た事で私たちの関係がわからなくなってきた。

四郎のせいでもないし、今日の事がなくてもいつか考えなきゃいけない時が来ただろう。

黙って道を歩く。

「私たちの関係って友達なのかな？」

思わず声に出ていた。

しかし後悔はない。

西東くんにとっての私って何？

友達？それとも他の何かなんだろうか？

「きつと…」

西東くんは言う。

俺たちはもつと深い絆で結ばれてるんだよ。

ななわめ（後書き）

多分おそろく次は過去編です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1781x/>

いちごの砂糖漬け

2011年12月1日19時52分発行